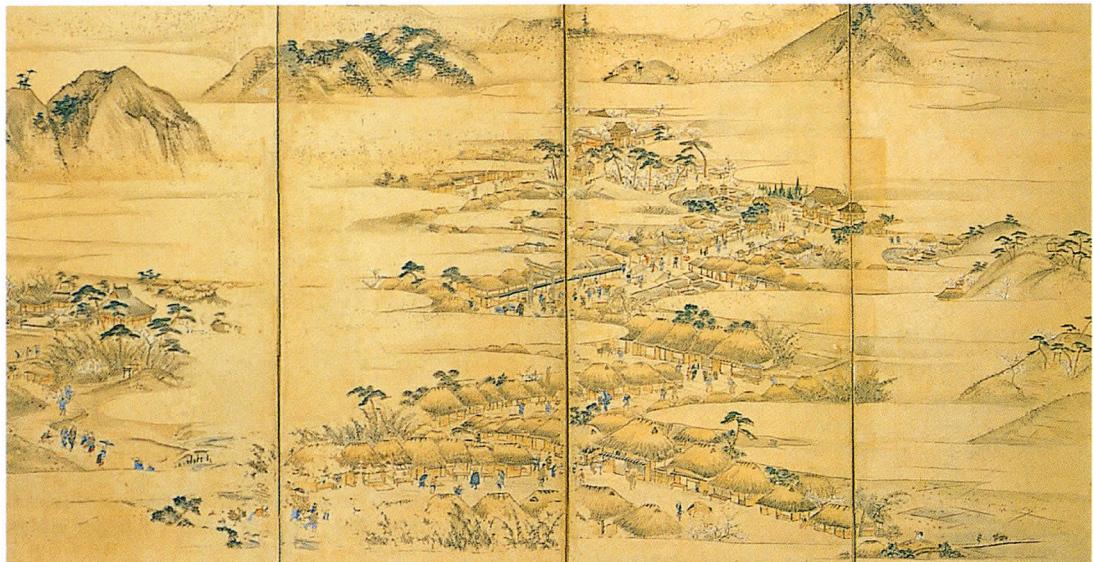


# さいとうしゅうはん



▲ 太宰府・博多図屏風(右隻部分) 個人蔵 (写真・九州歴史資料館提供)

「島原の乱戦闘図」等を描いた、秋月藩御抱え絵師の斎藤秋圃は、嗣子の江戸での出奔がもとで秋月を去り、福岡・姪浜等を経て、太宰府天満宮五別当御供屋菅原信覚の姉とみと再婚しました。太宰府錦之町に居を構えて、自由な町絵師として絵を描きました。

天保5年には妻、子と三人で生まれ故郷の京に旅立ち、神社仏閣に参拝し、名所見物をしながら筆をとり、伊勢神宮を拝し、名古屋に出て、名僧豪潮を訪ねるという六ヶ月の長旅を行いました。

花鳥風月、動物に植物、人物画に絵筆を執って、絵馬・屏風・掛軸と多才な町絵師として



▲ 花咲翁(部分) 個人蔵

活躍しました。

時には天満宮延寿王院より藩主黒田公への献上品として「鬼燻」の注文を受けたり、天満宮「袴垂図」をはじめとする絵馬の奉納に筆を執りました。また、近郊の屏風絵書き等々絵筆の跡は筑前はもとより遠く筑後、肥前にも及ぼしました。

聖福寺の仙崖和尚とは、特に交流が深く仙崖和尚も師事したという話が残っています。また、村田東園・石丸春牛・桑原鳳井の画家、原古処・亀井昭陽・奥村玉蘭等々文化人と深い交流がありました。

太宰府では吉嗣梅仙・萱島鶴栖という門人を育て、太宰府に南画家としての文化活動の基礎を造り、梅仙は拝山、鼓山と、鶴栖は秀山、秀峰と三代画家がそれぞれ続きました。

こうした両家は南画家の家風を太宰府に確守し太宰府文化活動の礎を築いたといえます。  
(木村明敏)

## ■斎藤秋圃略年譜

- 明和5年(1769) 京都・樋の口伊佐町に生まれる。
- 寛政7年(1795) 丸山応挙に入門。  
応挙死去。大坂の森徂仙(猿画の名人)に入門。
- 10年(1798) 年ごろ 福岡の上名島町に2ヶ月あまり滞在。
- 享和2年(1802) 大坂新町で滝沢馬琴に会う。  
3年(1803) 6月 『葵氏艶譜』を出版。  
九州へ修行の旅に出る。  
途中、宮島に3年ほど滞在して鹿を描く。  
長崎で江稼圃に学ぶ。
- 文化2年(1805) 6月 『つわものつくし』を出版。  
7月 秋月藩主黒田長舒に見いだされ、秋月藩御抱え絵師となる。  
この頃出版の『わすれくさ』に驚替図、松雛子図など九面を描く。
- 3年(1806) 3月10日 黒田長舒主催の太宰府書画展覧会に旋龍図を出品。
- 10年(1813) 斎藤と改姓。  
11年(1814) 4月 博多図絵馬一面が太宰府天満宮へ奉納される。
- 12年(1815) 桂垂図絵馬一面が太宰府天満宮に奉納される。  
序文を新たに『葵氏艶譜』が再版される。
- 文政7年(1824) 7月24日 妻ゆき死去。
- 文政9年(1826) とみと再婚。太宰府錦之町溝尻に居を構える。
- 11年(1828) 息子の璘太郎が家督相続。
- 天保5年(1837) 宗家訪問と墓参をかね、妻・次男(瑞五郎=梅圃)とともに京都、奈良、伊勢、尾張を巡る。
- 8年(1834) 秋月今小路町に居をかまえ、島原の乱戦闘図等を描く。
- 9年(1838) 長男璘太郎、江戸で出奔し家名断絶。
- 11年(1840) 「博多・太宰府図屏風」、「敦盛・直実図絵馬」を描く。
- 嘉永6年(1851) 「筑前太宰府うそがえ追獣図」を描く。
- 安政6年(1859) 10月16日 92才で天寿を全う。太宰府光明寺に葬る。  
\*花鳥、動物、特に鹿図を好み、号は秋圃・鶴圃・周圃・土筆翁・韋行・葵衛・雙鳩・準旭菴・茗哉などといった。

## 参考文献

- (1) 山内長三編『葵氏艶譜』文化出版局 1985.
- (2) 筑紫野市立歴史民俗資料館編『筑紫路の絵師』筑紫野市教育委員会 1989.
- (3) 小林法子「斎藤秋圃——その生涯と太宰府ゆかりの作品——」1993.



▲ 鹿図屏風(部分) 個人蔵(写真・九州歴史資料館提供)



宰府宿略図



▲ 敦盛・直実図絵馬  
(ふるさと館ちくしの保管)